

# インドネシアのジャワ農村における 社会と文化

Society and Culture of Rural Java in Indonesia : The Realities of Daily Life of the Peasantry

相山女学園大学文化情報学部教授

黒柳 晴夫  
Haruo Kuroyanagi

渡邊毅主任研究員：定刻の5時半になりました。平成25年度第4回人間講座を開かせていただきますが、まずは森棟理事長より開会のご挨拶をいただきます。

森棟公夫理事長：こんにちは。本日は大変寒い中、第4回人間講座にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。本学では2005年より人間学研究センターを設置いたしまして、毎年、人間講座を開催しています。今回の講座は、本学文化情報学部黒柳晴夫教授より社会学に関するご研究の報告をいただくことになりました。皆様方からご質問等お伺いし、講座を楽しんでいただけますと幸いです。

渡邊毅主任研究員：どうもありがとうございます。それでは早速今日のご講演に移りたいと思います。最初に黒柳先生の簡単なプロフィールをご紹介させていただきます。黒柳先生は専門は社会学ということで、1975年に東北大学大学院教育学研究科博士課程を終えられて、これまで社会学の研究を続けておられます。本学では文化情報学部設立の際に文化情報学部の教授としてお迎えしたのですが、その2、3年ほど前に人間関係学部在籍され、その頃は私も同僚ということで、何

回か一緒にお酒を飲む機会もありました。非常に研究ご熱心な先生だと思います。前回、第3回人間講座では稲村先生からブータンの話がありました。それと少しつながりような形で、アジアの大国であるインドネシア、その中心のジャワ島を対象に長年ご研究を続けてこられました。その一端をご紹介いただくということで、「インドネシアのジャワ農村における社会と文化」というタイトルで今日はお話を承りたいと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

黒柳晴夫教授：ただいま紹介いただきました、本学文化情報学部の黒柳と申します。先ほど理事長の話にもありましたように、寒い中たくさんの方にお出でいただき、大変恐縮に感じております。皆様方のご期待に沿うような話ができるかどうか心配しておりますが、後でまた遠慮なくご質問いただき、至らなかったところを補っていただくと大変ありがたいと思います。

## 1. はじめに

今日は、お手元の配布資料に案内してある内容をそのまま紹介するのではなくて、いくつか焦点をしぼり、お話させていただきます。インドネシアでは中央集権的な地方自治

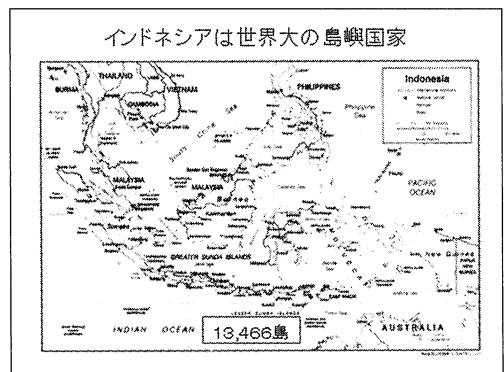
制度の改革が進められ、いわゆる旧スハルト体制の崩壊後、それと180度逆転し、地方や住民を重視した地方自治制度が制定されてきました。しかし、その改革が、短期間で進められ、民主化に対する人々の民意が不十分なままに行われてきたので、スハルトの権威主義体制が地方に拡散してきたのです。つまり、地方の自治体の多くの長が、スハルト的な汚職の体質を持つようになってしまったのです。それはなぜかと言いますと、国が担う外交、国防・治安、司法、金融・財政、宗教などの分野以外の行政分野については、州よりも県に予算を執行する権限が多く与えられたからです。そこで、地方自治体の利権に群がる人達が集まるようになった結果、汚職追放のための調査機関ができていたのですけれども、インドネシアの新聞などでは、県知事が逮捕されたとか、政党の党首やそのプレインの人達が逮捕されたというようなニュースが今も引きも切らないわけです。そして、2014年を迎えて総選挙と大統領選挙の年になりましたので、またそういう問題が出てくるかと思います。

そのような細かい話は、手元の資料を見ていただくこととしまして、私はその中からジャワ農村における農業の実態と、冒頭に話した地方自治の問題に結び付けて村落社会の自治制度について紹介していきたいと思います。ただ、ここで取り上げる事例はジョクジャカルタ特別州内の農村の問題になるのですが、そうした地方の問題を理解する際にも、インドネシア全体の抱えている問題、あるいはインドネシアという国がどういった成り立ちで構成されている国なのか、その特徴を知っていただくのは大変重要なことだと思

ますので、まずインドネシアの概要について簡単に触れさせていただきます。

## 2. インドネシアの概要

インドネシアの特徴について簡単に触れますと、インドネシアはまず、①熱帯湿潤気候地帯にあるということです。つまり、これから話すような農業がなぜ可能かというのはその地勢によるところが大きいわけですが、インドネシアという国は赤道直下の南緯12度から北緯6度くらいの所に位置しています。したがって、非常に高温多雨な気候です。季節は雨季と乾季があります。雨季というのは大体9月、10月頃から翌年の2月、3月頃までの期間です。雨季は、インドの方からベンガル湾を渡って湿気を帯びた風が吹いてきますので、雨の多い季節になります。一方、乾季は4月、5月頃から8月頃までですが、その時期はオーストラリア大陸を渡った乾いた空気がインドネシアに流れてきますので、乾燥して、天気も安定しています。したがって、日本で蒸し暑い夏を過ごすよりは、インドネシアの木陰で休んだ方がむしろ快適なぐらいです。

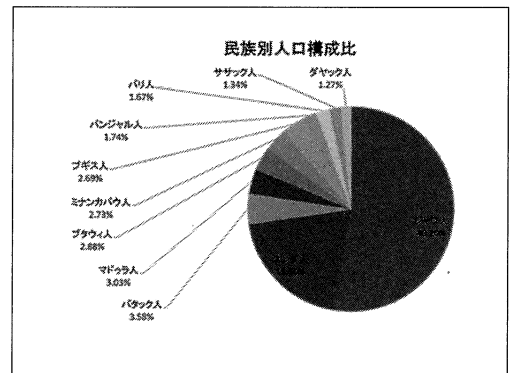


そしてインドネシアは、②世界最大の島嶼国家です。今、赤道の南緯北緯を申し上げましたが、実はインドネシアは、東西に長く、アメリカ合衆国にほぼ内接するほど大きな国です。ヨーロッパに移していえば、ちょうどトルコの辺りからイギリスの辺りまでの範囲に島々が散らばっているという大きな国で、海岸線の長さはカナダに続いて世界第2位です。また、インドネシアは13,466島の島でできていて、人が住む島だけでも3,000島以上あると言われています。したがって、島々に人々が分散している国が一つにまとまっていくには、国として相当多くのエネルギーやいろいろな施策が必要だということです。

そのインドネシアの島々に、③世界第4位の人口、2億3,990万人の人が住んでいます。人口規模で世界第10位までの国の中で、インドネシア、ブラジル、パキスタンなどの発展途上国の場合は多産少死の高い出生率の時期が続いて、現在は家族計画が進んで出生率がだんだん下がってきていますが、高い出生率の時に生まれた人口がたくさんいます。つまり、一般的に人口ボーナスと呼ばれている世代の人達が生産年齢人口としてたくさんいるので、ここに世界の工場といわれ、安い賃金の労働力を求めて世界の企業が集まっています。先行する中国では賃金が上がってきています。したがって、これらの国々にさらに企業が進出してくるわけですが、インドネシアも最近、賃金が上がりつつあります。

このように人口規模が非常に大きいばかりでなく、その人口の中身を見ると、いろいろな民族によって構成されている、すなわち④多民族国家だということ、したがって民族、言語、習慣、宗教などの多様な構成が

特徴になっているということです。



例えば、現在一番インドネシアで大きい民族はジャワ民族で、ジャワ島の中部と東部を中心に住んでいます。もともとジャワ島に住んでいる人達は、このジャワ人と、スンダ人、それとマドゥラ人です。スンダ人は、ジャワ島西部を中心に住んでおり、そしてもう一つのマドゥラ人は、スラバヤの前のマドゥラ島中心に住んでいる人達で、こういう人達がジャワに住んでいる主流の人達です。しかし、全国を見渡すと300以上の民族が住んでいるといわれています。民族というのは、例えばジャワ島の中で言いますと、ジャワ人とスンダ人は、ジャワの中のすぐ隣同士に住んでいるのですが、ジャワ語とスンダ語では会話ができません。

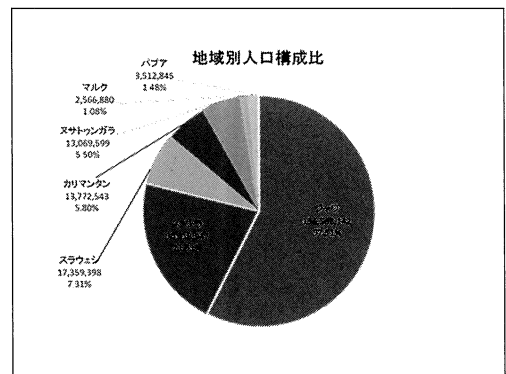
このように、インドネシアは⑤多言語社会でもあります。インドネシアの人達の共通の言葉となっているのは何かというと、インドネシア語です。多民族・多言語社会のインドネシアでは、インドネシア語は、国際語である英語に相当するような機能を持っています。インドネシアは独立後、初代スカルノ大統領が、古くからマレー半島からインドネシアの海岸地方で商業活動用語として用いられ

てきたムラユ語に由来するインドネシア語を国語にしたわけです。それで、人々はインドネシア語を通じてナショナルアイデンティティを持つようになってきているわけですが、普段学校、マスコミ、会社、役所ではインドネシア語を用いても、家に帰ると両親や祖父母とはジャワ語で話すというバイリンガルな生活をしているのです。そして子ども達は、学校で英語が必修ですから、トリリンガルな生活をするようになります。つまり、生活の必要性から、言語に対する適応性が私達よりずっと豊かだということです。

インドネシアは一方で、近代化が進んでいますので、例えばジャカルタのように林立する高層ビル群、スラバヤの工業地帯、あるいはカリマンタン島の石油や天然資源の開発とか、近代工業やそれを支えるものが非常に進んでいるところもあるれば、他方ではまだ伝統的な生活習慣を留めた民族社会がそのまま残っているところもあります。こういう近代的なものと伝統的なものが並存している⑥生活習慣の多様性、これもインドネシアの一つの特徴です。

もう一つは、⑦宗教の多様性です。インドネシアは現在、国民の約88%がイスラム教徒、ムスリムになっています。ところが、かつてポルトガルやイギリスの植民地支配を受けた所を中心にキリスト教徒の人達もいます。それから、こうした宗教が入ってくる前には実は、インドネシアにはインドの仏教が入ってきて、7、8世紀頃には仏教が非常に栄えて、仏教遺跡として皆さんご存じのようにボロブドゥールが建設されました。その後、ヒンドゥー教が入ってきて、ヒンドゥー教の王国が形成されるようになり、そのためヒ

ンドゥー教の遺跡もたくさん残されています。さらに、13、14世紀頃から徐々にイスラム商人、インド商人やアラブ商人がマラッカ海峡を通して商業域を段々と広げていくなかで少しずつイスラムが入ってきて、16世紀ぐらいになるとイスラム教が格段に広がっていき、イスラム王国が形成されるようになりました。したがって、インドネシアの国の皮を剥いていくと、イスラムの下にその前のヒンドゥーの文化とか、仏教の文化とか、それからアニミズムの世界とか、そういったものが重層しているのです。それもインドネシアの特徴です。



先にインドネシアは世界第4位の人口と申しましたが、実はその約6割の人々がジャワ島に住んでいます。しかも、ここに政治と経済の中心が集中しています。しかし、このジャワ島がインドネシアの国土全体に占めている面積の割合は、わずか6%くらいなのです。これから私が申し上げようとする話題が広がる世界は、正式にはヨグヤカルタと読みますが、ジョクジャカルタ特別州という所です。

### 3. スハルトの開発主義

さて、以上のようなインドネシアの特色あ



る国とその歴史を踏まえると、第二次世界大戦後のインドネシアの発展のプロセスのなかで、特に第2代大統領のスハルトが目指したのは、この多民族国家、多民族社会の課題をいかに克服して国づくりをしていくか、ということであったと思います。彼のやったことの良否はともかくとして、今のように発展させてきたことは事実です。その課題克服のために彼が目指した一つは、(1) 国民国家として一つの国をつくっていく、みんな同じ国民として同じ方向を向いていくというアイデンティティーの形成です。もう一つは、伝統的な社会のままに留まるわけにはいきませんから、(2) 近代化・開発を進めていくことです。この二つのことをどういう視点に立って進めていくかを考えるときに、例えば開発主義でよく言われているように、①国家優先、中央政府中心に国づくりを進めていこうとする立場です。それは統一を強調していくことになります。これに対して、もう一つは、②地方と住民の権益を重視し、それぞれの民族の多様性や伝統や文化を重んじようとする立場です。これらを同時に平行して進めることは大変難しいことであります。スハルトがまず取ったのは①のほうです。つまり、中央集権的統治主義の立場で国づくりを進めてきました。そしてスハルト体制が崩壊した後、冒頭で申し上げました民主化と多様化を志向した地方分権主義に立った地方自治制度の改革が進められています。

インドネシアは、初代大統領のスカルノの時にインドネシア建国の五原則や国章のガルダが定められました。ガルダと言えば、インドネシアの航空会社の名前としてご存じの方も多いと思いますが、もともとガ

ルーダというのはインドの神話に出てくるヴィシュヌ神を乗せて空を駆ける霊鳥です。インドネシアは、インド文明と中国文明の狭間に位置してきましたが、インド文明の影響を非常に強く受けてきました。東南アジアは総じてそうだと思います。そのガルダが止まっているリボンの所に“BHINNEKA TUNGGAL IKA”（ピンネカ トゥンガルイカ）と書いてありますが、それが「多様性の中の統一」という意味です。これは、語源的に言うとサンスクリット語から来ている言葉です。このように、インドネシアの文化は、インド文明とのつながりが非常に深いのです。

第2代大統領のスハルトは32年間大統領の地位に君臨したわけですが、彼が取ったのはさきほどお伝えした国の統一、国家優先です。開発主義の立場に立って、国家建設を中央集権的に上から進めていきました。開発主義といえば、東南アジアでは、例えばマレーシアのマハティールとか、フィリピンのマルコスとか、タイのタノーム政権とか、そういう人達はみな開発主義の立場で国づくりを進めてきました。個々の地方や住民の視点に立つと言うよりは、国づくり、国の統一、国の発展、そちらを優先して開発を進めていくという開発主義の立場です。

そして、まず取り組んだ大きな問題は、①食糧を自給するということでした。そのために農業生産が大きな政策課題になるわけです。なぜなら、農業で食糧の自給ができるようになって初めて外貨を工業化に向けることができるようになるからです。それからもう一つ取り組んだ問題は、②地方の多様性やいろいろな党派の意見を取り入れていたのでは

国の施策を統一的に進めていくことはできないため、中央集権的な統治機構をつくり、一元的な地方制度の下で全国を統治していくことです。その中で出てきたのが、1979年の「村落行政法」という法律です。

#### 4. ジョクジャカルタ特別州の農業

これから写真で説明するのは、インドネシアのジョクジャカルタ特別州という所です。そこはハメンクブウノ10世というスルタン（王）が住んでいるところです。彼は現在この州の州知事になっています。ジョクジャカルタ特別州は、ジョクジャカルタ市と四つの県から成っています。ジョクジャカルタは、ボロブドゥール遺跡観光の拠点になっている所ですが、その他プランバナンのヒンドゥー教遺跡、ジョクジャカルタの王宮など、観光地として知られ、王宮のある古都ジョクジャカルタ市は京都市と姉妹都市になっています。

また、ジョクジャカルタは教育都市でもありますので、ここにはガジャマダ大学というインドネシアで一番古い国立大学をはじめ、100以上の大学があって、これらの大学に進学を目指す高校生も全国から集まってきております。

このジョクジャカルタ市から南側にインド洋にかけて広がるのが、これから紹介するバントゥール県です。ここでは農業を中心とした農村の生活の様子と、村落自治とそれに関連した村長選挙について紹介したいと思います。

バントゥール県は、2006年の中部ジャワ地震で4,143人も死者が出て、大きな被害を受けた所です。そのバントゥール県内で、

私は三つの村でフィールドワークを続けてきました。その中の一つ、ジュティス郡チャンデン村の事例を話したいと思います。

事前に農業についてご質問をいただいておりますので、この地域の農業から話したいと思います。スハルトが国づくりの中でまず力を入れたのは、前に指摘したように食糧を自給することでした。国民の主食である米を輸入していたのでは、外貨をストックしていくことはできません。したがって、米を自給できるようにして、米を輸入するお金を工業化に廻すことができるような政策を進めていくことです。発展途上国ではどこでもそういう方向を目指してきたと思います。

1960年代に、フィリピンの国際稲研究所という所で高収量品種が開発され、それが東南アジアでグリーン革命（Green revolution）と呼ばれている米の飛躍的な増産を可能にできたのです。高収量品種は、化学肥料と農薬の使用を促し、在来の品種に比べると収量が非常に高く、短期間で収穫できます。そして、高収量品種は、<sup>なんかんしゅ</sup>短稈種と書いておきましたが、稲の丈も短くて、インドネシアでは1965年から導入されるようになって、1984年には米の自給が実現できました。この年、スハルト大統領は、FAO（国連食糧・農業機関）から米の自給を達成したことで表彰を受けています。稲の昨期が、先ほど4ヶ月だと言いましたが、一つの圃場<sup>ほじょう</sup>で一回稲を作るのに4ヶ月で済むと、1年間に三回できるわけです。そうすると、作付け延べ面積が1年間に三倍になるということです。所有も経営も非常に小規模面積ですけれども、こうして作付け延べ面積が増えることで、米の収穫量が増えて自給が可能になったのです。

米の自給が可能になると農家の人達は、米がだぶついて米作では所得増につながらないため、もっと高く売れる農作物を作るようになります。いわゆる①複合経営です。つまり、米だけでなく他の商品作物、野菜とか家畜の飼育などの作目を取り入れることで農家の農業所得源の多様化と増大を図るわけです。

もう一つは、米作は安定した収穫が得られるので、あとはインフォーマルセクター、都市の雑業などに就いて、農家の所得源を農業以外に増やすというやり方、いわゆる日本の②兼業化です。そういう方向に農家の人達は動いていきますが、バントゥール県のチャンデン村のなかでその具体的な事例を見てみます。

まず、年間に3作できるということはどういうことかという、先ほど雨季が9月～4月頃まで、乾季が5月～8月頃までと言いましたが、天然水を確保できる雨季のときにお米を二回作って、雨の少ない時期に田んぼで畑作物を作るという組み合わせの3作です。それが最も一般的に行われてきた伝統的な作付けパターンです。乾季のときにはどんなものを作るかというと、技術をあまり要さない大豆とか落花生です。しかし、商品作物が導入されるようになり、農家も収入を増やすためにトウモロコシとか野菜、にんにく、玉ねぎ、唐辛子、トマト、メロンといった、ある程度農業技術が無いと収量を見込めないものが導入されるようになってきているのです。その結果、どのような作付けの組み合わせをしているかというと、雨季のピークである9～12月に米、その後もう一回1月～4月に米、そして乾季になると大豆や落花生を作付けするという組み合わせが、伝統的なパ

ターンです。ところが今は、例えば雨季に米を作った後、田を畝上げて玉ねぎを作り、更にその後で唐辛子を作り、そして米に戻るとか、あるいはこれらの野菜作りをさらに続けて、1年後に米に戻るなどの組み合わせです。米は自分達の飯米を確保した残りを売り、お金はそれ以外の作物の販売で稼ぐというわけです。

農家の農地所有面積が狭いのですが、それは均分相続制と関係しています。子どもは、女の人も男の人も基本的に全て平等に相続します。日本のように長男だからという、きょうだいのなかの地位の違いによって相続権に違いはありません。したがって、お父さんやおじさんの世代の土地財産は、世代を重ねるごとにどんどん細分化されて、小さくなっていきます。その結果、小規模経営の農業が行われることになるので、日本のように機械を導入して大規模な経営を目指そうとする発想は生まれにくいのです。

もう一つは、先ほど「土地無し農民」と書きましたが、農村に住んでいるけれど農地を持っていない人達が4割ぐらいいます。この人達は、農家に雇われ、農作業の労賃を得て、また収穫作業では収穫した米の1/10とか一定の割合を現物給付で受けて生活しているのです。要するに、農村に余剰労働力がすごく滞留しているので、農業経営をしている人達は、自家労働力だけで自分達の農業所得を上げようということにはならず、もっぱら土地無し農民の雇用労働力に頼った経営をしているのです。

ジャワの水田



写真で分かるように、ジャワ農村の水田の景観は、ヤシなどの見慣れない木が生えていること以外は、土の色、肥沃で碁盤目状にきちんと圃場整備された田、どれも日本の農村と全く変わりません。これは、オランダ時代からサトウキビ栽培をするなかで、灌漑などのインフラが整備されてきた歴史があるからです。

耕耘機の普及



これは12月に撮った写真ですが、こちらでは苗代で苗を作っており、むこうでは田起こしをし、さらに代掻きをして、この後、田植えが始まるということです。この地域では、1990年代前半の頃までは、牛を持っている人に頼んで田んぼの耕起や代掻きの賃耕をしてもらっていたのですが、90年代中頃

から日本製のトラクターが入って、トラクター所有者による賃耕に変わってきて、現在では田んぼから牛耕する牛の姿が見られなくなりました。かつては白い一こぶ牛のサピーか、黒い水牛のクルバウが、牛耕に使われてきました。田んぼの畦は日本と同じように鍬を使って作ります。

田 植



田の草取り



苗代の苗が大体20～24日くらい育つと田植えになります。この地方では、大体苗代の苗を採るのは男性で、田植えをするのが女性です。田植えは、目印をした竹の定規を使って植え、正常植えをしています。田植え後1週間ぐらいすると施肥をし、さらに2～3週間くらい経つと、一回目の田の草取りをします。鉄板の下に刃が出たゴスロと呼ばれる除

草具を使って除草作業をします。やがて4ヶ月経つと、収穫の時期になるわけです。

足踏み脱穀機



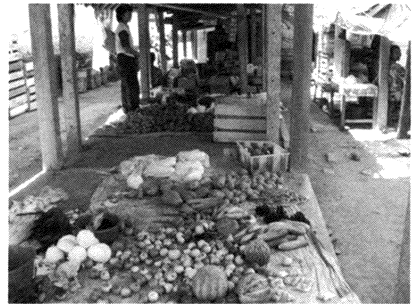
稲刈りは鎌を使って行われていますが、脱穀は2000年代に入ってから足踏み脱穀機が普及してきています。それまでは、この稲わらを石や木の丸太に叩き付けてモミを落とすといった脱穀をしていたのです。また、子どもの教育などで急にまとまったお金が必要になった場合には、まだ稲刈り前の田んぼの米を仲買人に売ることも行われています。この場合には、仲買人が農作業の労働者を連れてきて収穫作業をしますので、農家の売値は買いたたかれることになります。いずれにしても、農家は、農作業の多くを家族労働力ではなく、雇用労働力に依存しています。

商品作物の唐辛子



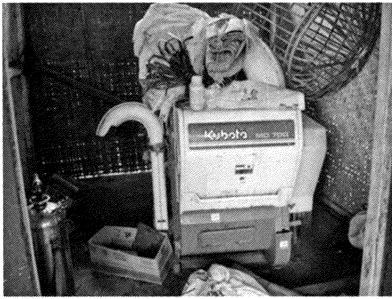
乾季になると田んぼの中に水が入ってこなくなるし、引けなくなりますので、従来のやり方だと稲刈り後の田んぼをそのままにして、そこに竹で穴を開けて大豆や落花生を蒔き、3～4ヶ月後に収穫します。このような伝統的なやり方に対して、例えば雨の少ない時期に畝上げをして、ここに玉ねぎやニンニクを、あるいは唐辛子を植えて、このような商品作物の野菜と組み合わせるやり方です。

村の市場(パッサール)



次に、そうした農産物を農家の人がどのように売るのかについて見てみると、農家を廻ってくる仲買人に売るか、パッサールと言われる市場に持って行って、市場の業者の人に売ってもらうのが一般的な方法です。写真にあるのは、県が持っている公設市場なのですが、ただ屋根があるだけです。このような市場は、農産物の他に、インドネシア版納豆のテンペ、豆腐、肉、魚などの食料品、さらに衣料品が売られているばかりか、さらには仕立て屋さんとか、刃物屋さん、農具やその修理屋さんなども店を広げていて、いわば農村の生活を支える場になっています。

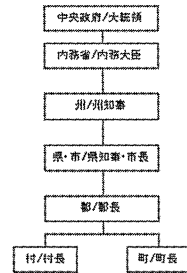
日本の援助で導入された動力脱穀機



ところで、日本の支援で日本製の稲刈り機や脱穀機の導入が図られていますが、このように機械化を進めると、農業労働者が雇用の場を奪われることになり、彼らが生活の糧を失っていくことになりますから、それほど普及が進んでいません。また、その支援での問題点は、メンテナンスの技術を持つ人を育てることが不十分なために、機械が壊れると使われないまま放置されてしまっていることです。

さて、スハルト体制の下で、このように米の自給が可能になり、農業がそれなりに発展することができたのは結局、農村の隅々まで国の農業政策を浸透させるような受け皿を作ってきたからです。それが前に触れた1979年制定の「村落行政法」です。つまり中央集権的な地方行政制度を組織し、上から州、県、郡、そして村という制度を一元化して作ってきたことで、中央政府の政策を地方の末端に至るまでくまなくおぼすことができるようになったのです。かつて地方では州が一番大きな力を持っていて、例えば県知事や市長は州知事が任命する、郡長は県知事が任命するということに、上から下へと人事を通して上下関係のヒエラルキーができていたわけです。

インドネシアの地方行政制度



村には役場が置かれ、役場には国の定めにしたがって書記と五つの業務の担当スタッフが置かれていました。村のなかは部落に分けられて部落長が置かれ、また部落の中は隣組（RT：エルテー）に分けられて隣組長が置かれ、そして複数の隣組で大組（RW：エルウェー）が作られ大組長が置かれていました。また、村には村長の諮問機関としての機能を持つ村落協議会が置かれていましたが、議長は村長が兼ね、議員は村長が直接任命するものでしたから、村落協議会は、いわば村長の諮問に盲判を押し、あるいはそれを正当化するためだけの役割を担っている存在になっていた、ということです。

## 5. 地方自治制度の改革と村落自治組織

先ほどスハルト体制下で農業政策がそれなりの成功を治めたのには、1979年村落行政法の制定によって村を全国統一的に組織したことを指摘しましたが、もう一つ指摘しておきたいことは、村のなかに上からのさまざまな農村開発プログラムを進めていくための受け皿として、さまざまな集団が各関係省庁を通して作られてきたことです。一つの村や部落のなかの成人男性、成人女性、青年、子ども

も、あるいは学校に行けなかった人達を対象にさまざまな組織が作られ、こうした組織とその重なりが村のなかを一元的にまとめていく役割をしてきました。従って村のなかでは実は、なかなか自分の意見が言えないという雰囲気だったのです。スハルトの権威主義体制と言われています。一見、いろいろな集団ができて良いように見えますが、上から下ろされてきたものをただ村人がこなすだけという雰囲気の中で農村・農業開発政策が進められてきたことです。

日本の制度や活動が、うまく取り入れられているものもあります。例えば、母子保健グループの活動にポスヤンドゥー (Posyandu) というのがありますが、5歳までのお子さんの健康と乳児死亡率を下げるために、村の女性が協力して毎月一回、赤ちゃんとお母さんを集めて健康診断を行ったりします。健康診断というのはお医者さんがするのではなく、例えば頭の大きさを測ったり体重を量ったり、そして健康食や牛乳を供する行事ですが、そのような活動によって健康に対する意識を高めると同時に、一種の相互扶助ゴトンロヨン (Gotong Royong) で子どもを育てていくことが行なわれてきました。こうした組織や活動が、農村開発にそれなりの大きな役割を果たしてきたことは評価すべきことであると思います。ただそれが、もっぱら上下達で、ボトムアップの活動でなかったことがやはり問題だったということです。

スハルトは、大統領に32年間も就いてきたわけですが、常に国家優先・中央政府中心の立場に立ってきましたので、地方に産する天然資源の輸出による利益もみんな中央政府が吸い上げていきました。したがって、輸出

天然資源に恵まれてきたカリマンタン島やスマトラ島の人達にとっては、非常に不満が鬱積していたわけです。それで地方にもっと利益を配分することで、地方の活性化を図っていくことが望まれていたわけで、そういうことも大きな背景となってスハルトは退陣せざるを得なくなりました。

そこで新たに制定されたのが1999年地方行政法という、いわば180度転換した、地方中心・住民中心の地方自治制度の制定でした。スハルトの後を受け、副大統領であったハビビがそのままピンチヒッターとして大統領に就任したのです。彼は、国民協議会による大統領としての信任を受けていませんし、インドネシアのマジョリティーであるジャワの出身者でもなく、なおかつスハルトのブレインとして非難の目で見られていました。そんなハビビが大統領としての地位を保持していくためには、それらを乗り越えていかなければなりませんでした。

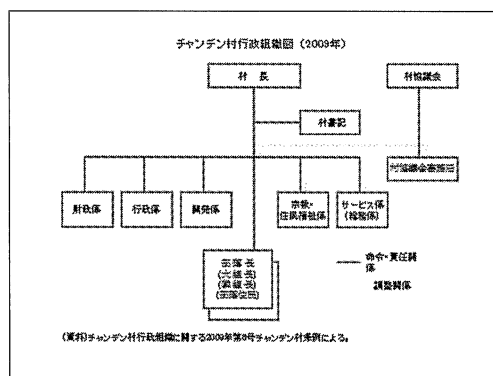
そういうことのために、むしろ脱スハルトで民主化に向けて制度を一変させることを目指したわけです。それがこの地方自治の民主化なのですが、もう一つは地方の財政不満のために、中央に集めたお金を地方に配分する財政制度を、財政均衡法という法律で実現させました。このような地方自治改革によって、彼は支持を得たかには見たのですが、わずか1年半くらいで退陣に追い込まれてしまったわけです。そして、その次に選挙で選ばれたワヒド大統領が就任し、彼が1999年地方行政法を施行したのです。

この自治制度がいかに民主的であったかということは、いろいろ指摘できるわけですが、中央と地方の関係が上下関係でなくなったと

いうこと、すなわちそれぞれが独立した自治体の単位として制度的に位置づけられるようになったことです。それからジャワの村落制度を全国に強制してきた1979年村落行政法をやめて、それぞれの民族の伝統的な村の制度を復活させることを認め、特に旧来の村の名前の使用を認めたことです。そして民主化の一番象徴的な改革は、村に行政機能を持つ村政府とは別に立法の機能を持つ村議会(BPD)が設置されたことです。村議会は、村長の解任提案権も持ち、いわば村落行政のチェック機能を果たすことになって、村は非常に活性化しました。活性化すると同時に中央の政党が村にまで下りてきて、こうした議会を政党色に染めてしまうと、あるいは村長と村議会が対立して村政が機能麻痺に陥るとか、一方でそういった当初の制度設計になかったさまざまな弊害も起きてきました。それは、村議会の議員が、民主主義に不慣れたために、選挙区の代表という意識よりも個人の立場や利害で政治的主張をするというような、制度的に想定されていなかったことが起こってしまったのです。そのため、1999年地方行政法は、すぐに改正されることになってしまったのです。

それが、2004年に制定された現行の地方行政制度、すなわち2004年地方行政法です。インドネシアに地方自治と民主化をもたらしたと高く評価された1999年地方行政法が、なぜ短期間のうちに改正されたかという理由は先ほど申し上げましたので、この改正によって村落行政に関してどのような変化があったかの一例をあげると、村議会が村協議会に変わったことです。両者は頭文字を取ってともにBPDと表記されますが、1999年地

方行政法は村議会(BPD: Badan Perwakilan Desa)で、2004年地方行政法は村協議会(BPD: Badan Permusyawaratan Desa)です。村議会が村協議会に改正されたことによって、喧々諤々と議論を戦わすのではなく、話し合いや協議で、村のためにみんなが一番良い結論を話し合って導き出すという方法を取るようになったのです。これはインドネシアの伝統的な話し合い、全員一致というやり方です。このような協議方式がとられるようになると、話し合いで大きな影響を与える人達は、村のなかの有力者、名望家、長老といった人達で、結局彼らの声が大きくなります。そのため、一般の人達が意見を出しにくい雰囲気にもまた戻ってしまうのではと危惧されることから、民主化の後退が言われています。

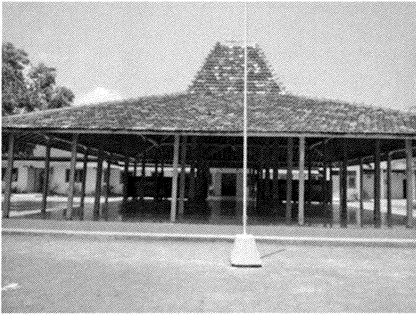


それから、改正によるもう一つの変化は、村役場の書記が公務員になったことです。公務員になると彼は、県から給与、そして定年になれば年金が保証されることになります。いってみれば、村役場の中に公務員の人が一人居る楔のように突き刺さっている格好になっていて、県の意向がその人を通じて反映されるという仕組みになっているわけで、村の自立性がそれだけ損なわれるのではない



か、とも言われています。村協議会と村長とは上下関係ではなく対等で、村協議会は村政府とは自立しているわけです。この村協議会の議員が、選挙区ごとに住民の話し合いによって選ばれます。1999年地方行政法では、選挙区ごとに住民の投票で選ばれていたわけです。

チャンデン村の集会所



ここでは、村協議員の選挙ではなく、チャンデン村の村長選挙の実例を写真で紹介したいと思います。チャンデン村は、2006年の中部ジャワ地震で死者251人、全壊家屋3,008棟の非常に大きな被害を受けたので、役場の建物が再建されて屋根などがまだきれいです。

村長になることができる要件というのは、①義務教育を終わっている、すなわち中卒以上である、②村に一定の期間以上住んでいる実績がある、③25歳以上である、④禁固犯罪歴がない、などがありますが、その他にインドネシアの特徴的なことは、⑤唯一神アッラーへの信仰心を持っていること、⑥建国五原則パンチャシラと1945年憲法への忠誠を誓うこと、というようなことがあります。村長の任期は6年で、一度再任が認められています。そして、村長に選出されるためには村

長選挙で、単独で25%以上の得票率があることが条件になっています。もしそうでないと、決選投票になります。まず、村長選挙は、投票3か月前までに村に選挙委員会を設置することが、選挙委員会条例で決まっています。それで、立候補の受付をして、候補者の立会演説会を開きます。その立会演説会はいろいろなやり方がある、候補者がみんな各部落を回って演説をしていくやり方もあれば、村の集会所のような場所に村民を集めて行うようなやり方もあります。投票は、各部落あるいは、大きな部落では複数に分かれて設置された投票所で行われ、各投票所ごとに開票と集計をし、その集計結果を村全体に集めるというやり方をとっています。

ブレンブータン部落集会所を利用した投票所



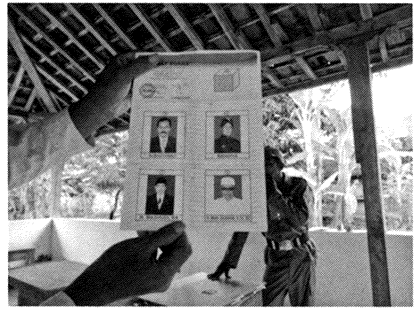
今回の村長選挙には4人が立候補し、投票は12月15日に行われました。候補者4人の顔写真のカラーコピーのポスターが村内に張られています。選挙の当日には、選挙の立会いと円滑な実施のために、村役場には県の地方課のこの村の担当者、警察および軍隊の担当者が来ています。投票時間は、全投票所とも午前中の7:00～12:00で、そのあと各投票所で開票し、全村での集計は14:00から行う日程です。有権者は17歳以上とそれ以下

の結婚している村民で、今回の有権者総数は9,293人です。

これは、チャンデン村の、私が調査しているプレンプータン部落という所の事例です。プレンプータン部落は、隣組が全部で五つあって、1組～2組で一カ所、3～5組で一カ所と二カ所に投票所があって、今からお見せる第19投票所は、3～5組に設置されている投票所です。投票所の管理・運営は、部落ごとに決められている選挙委員たちによって行われ、さらに隣組ごとに任命されている社会保護委員（LINMAS）が立ち会います。また、各立候補者の立会人も投票所に詰めています。

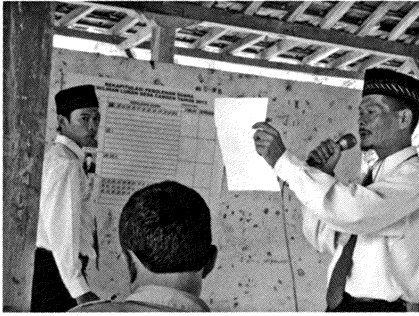
第19投票所は、この部落の人達の集会所になっている場所で、ジャワ独特の屋根の形をした吹き抜けの建物です。投票所に有権者が入ってくると、有権者通知票を受付に提示し、投票用紙を受け取ります。投票用紙には4人の候補者の顔写真がカラーコピーされていますので、記帳台に移動して、記帳台に用意されている釘を使って投票用紙の投票したい人の写真部分に穴を一カ所あけます。これは、読み書きができない人にも選挙権の行使ができるようにするためにとられている方法です。この穴があけられた投票用紙を投票箱に投入して退場しますが、退場の際に出口に用意されている青色のインクをいずれかの指に付けて、再度投票所に入場できない目印とします。

投票用紙



開票も同じ投票所で、選挙委員の人たちによって行われます。開票作業は社会保護委員の監視の下で行われますが、まず、投票箱から投票用紙を出して投票者受付数と照合したうえで、選挙委員長が、一票一票穴がどの候補者にあけられているか、複数あけられているかを、他の選挙委員と確認し、同時に候補者の立会人も確認してもらいます。一票ごとにその得票数を、ボードに張り出した集計表の候補者の枠に記入していきます。記入の際には5票ごとの塊になるように記入するのですが、日本では普通「正」の字を書きますが、ここでは一本棒を縦に四本引いて、最後に斜めにそれにクロスするように一棒を引くやり方で五という表記をしていきます。開票のときになると、集落の人達も集まってきて、一喜一憂して投票結果を見守ります。この第19投票所の開票予定は12:45～13:30でしたが、投票終了後すぐに開票がはじめられ、13:00に終了しました。ここの投票所の有権者数は368名でしたが、開票結果は、投票総数が320で、候補者A—70票、候補者B—7票、候補者C—12票、候補者D—226票、無効5票でした。投票率は87%弱でした。不在者投票の制度はありません。

穴を確認して得票者名を読みあげる選挙委員長



一方、各投票所からの結果が出ると、その結果は村の選挙委員会に報告されて、全村の投票結果が役場で集計されます。現在はコンピュータを利用して集計されていまして、各

候補者の集計経過が役場の体育館の壁にプロジェクターでリアルタイムで映し出されています。また、それは村の中にネットで中継されています。このような投票と開票のプロセスを見ると、事前の買収はともかくとして、開票の過程でいろいろ不正が起こることは非常に少なくなっているということが出来ます。これも村落自治の民主化が確実に進んでいることの一つの証だということ出来ます。

長時間になって申し訳ありませんでしたが、本日はこれで話を終わらせていただきます。どうもご拝聴ありがとうございました。